

生活防災及び地区防災計画制度から考察する 「識災」豊かな実践共同体とそこでのアイデンティティ形成 ～岩手県陸前高田市米崎地区でのフィールドワークを通して～

HS23-0047H 本間 智裕

論文目次

第1章	論文課題・仮説・方法論
1-1.	論文課題
1-2.	仮説
1-3.	方法論
第2章	災害と陸前高田市
2-1.	東日本大震災の概要
2-2.	岩手県陸前高田市
2-3.	陸前高田市での東日本大震災の被害状況
第3章	フィールドワーク
3-1.	フィールドワークを設定した経緯
3-2.	現地調査
3-3.	避難マニュアル等住民説明会
第4章	避難マニュアル等住民説明会から読み取る地域防災計画の限界
4-1.	避難マニュアルについて
4-2.	避難所運営マニュアルについて
4-3.	地域防災計画制度の限界
第5章	地区防災計画制度
5-1.	災害対策基本法
5-2.	地域防災計画制度
5-3.	地区防災計画制度
第6章	生活防災
6-1.	2つのリスク
6-2.	第3の〈道具〉
6-3.	実践共同体
6-4.	生活防災
6-5.	高知県四万十町興津地区「ぐるみのとくみ」から見る生活防災
6-6.	地域全体の活性化と意識改革
第7章	考察
7-1.	地域防災計画制度の限界（まとめ）
7-2.	生活防災（まとめ）
7-3.	再生の里ヤルキタウンの活動から生活防災を見る
7-4.	ヤルキタウンを原点としての新たな実践共同体が作る地区防災計画の可能性
7-5.	「識災」概念
7-6.	米崎地区を例にして考える「識災」概念
終章	結論

論文概要

第1章：論文課題・仮説・方法論

東日本大震災による被害について、岩手県陸前高田市内の一時避難場所の浸水被害を踏まえ、現在作成中の避難マニュアル・避難所運営マニュアルに求められる項目、及び平常時から必要なことは何かを提示する事を論文の研究課題とした。そのうえで仮説を「岩手県陸前高田市米崎地区は「再生の里 ヤルキタウン」を拠点にして、地域防災力の向上につながる生活防災とその実践共同体を形成でき、「成解」となる「地区防災計画」を作成する事が可能である」とした。

また、佐藤郁哉の『フィールドワーク増訂版』を参考に文献調査や現地調査について概説した。

そして、対象の設定を行った。「再生の里 ヤルキタウン」は筆者が所属するボランティアサークルが活動でお世話になっている NPO 法人で、陸前高田市米崎町に“憩える！集える！元気を発信する！”をスローガンに、みんなのコミュニティ広場の創設などを行っている。なお、論文内における米崎地区、及び高田地区は地図上の米崎町、及び高田町と同範囲であり、論文の構成・表記上、主に「地区」として扱う。

第2章：災害と陸前高田市

はじめに、内閣府のホームページを参考に東日本大震災の概要を把握したうえで、『陸前高田市東日本大震災検証報告書』、及び「陸前高田市地区防災計画」を参考に、陸前高田市の概要を説明した。そして、陸前高田市の東日本大震災における被害状況を示し、一次避難場所における浸水被害とそれによる犠牲者が多く出た事を踏まえ、一次避難場所の設置経緯を説明した。

第3章：フィールドワーク

現地調査は計4回行った。第1回調査では「再生の里 ヤルキタウン」の理事長・熊谷さんから

震災時の一次避難所での浸水被害について聞いた。第2回調査では、ヤルキタウンで行われた明治大学の研究チームと住民による「逃げ地図」の作成の現場観察を行った。第3回調査では、陸前高田市役所防災対策室に行き、「避難マニュアル等住民説明会」の存在を教えてください、その説明会の傍聴の許可をいただき、その日の夜に米崎地区での説明会が開かれるとのことだったので参加・傍聴した。第4回調査では第3回調査に引き続き、高田地区での住民説明会が開かれていたので傍聴した。

第4章：避難マニュアル等住民説明会から

読み取る地域防災計画の限界

上で紹介した「避難マニュアル等住民説明会」での米崎地区と高田地区の住民の質問・意見を地区ごとに比較し、同じ陸前高田市内であっても地区ごとに異なる形態の被害が起き(今後想定され)、異なる対応が必要であった(今後求められる)ことを示した。そして、陸前高田市全体を通しての東日本大震災級の災害に対応できる避難マニュアルの作成には限界があるのではないかと筆者は考えた。

第5章：地区防災計画制度

『地域防災計画の実務』(京都大学防災研究所,1997)、及び『“地域防災力”強化宣言(増補)』(鍵屋一,2003)を参考に災害対策基本法、及び地域防災計画制度について説明し、また地域防災計画が行政主導になってしまっているなどの問題点について触れた。

そして、東日本大震災で行政機能が麻痺してしまった(公助の限界)ことから、自助・共助による「ソフトパワー」の重要性が強く認識され、特に地域コミュニティにおける共助の重要性が強く認識されたことなどから地域コミュニティレベルでの防災活動を促進し、ボトムアップ型での「地区防災計画制度」が創設されたことと、その詳細を『平成26年度版 防災白書』を参考に説明した。

第6章：生活防災

第6章では文献研究をもとに、矢守克也の『防災人間科学』から、生活防災という概念を説明している。まず、生活防災を説明する前に矢守が挙げる防災に関する3つの〈道具〉を説明し、特に

生活防災で用いられている、「わがまち」「我が家」にだけ通じるローカルな知識や対策(成解)を指す第3の〈道具〉の重要性を示した。そして高知県四万十町の事例をあげて生活防災を説明し、「ヤルキタウン」にあてはめた考えてみた。

第7章 考察

第3章から第6章を通して得た「第一次資料」及び「第二次資料」を踏まえて、ヤルキタウンの諸活動から生活防災と実践共同体、地区防災計画の可能性を見出した。

結論

岩手県陸前高田市米崎地区は「再生の里 ヤルキタウン」を拠点にして、地域防災力の向上につながる生活防災とその実践共同体を形成でき、「成解」となる「地区防災計画」を作成することが可能であると言えた。

また、別の視点から、防災文化の営みの初期段階として、地域住民による災害への認識と地域に対する意識を持つという事から、自らの地域の「成解」を見出す営みが、地域によって多種多様であることからこれを「識災」とし、あらゆる災害とその災害に起因する被害が想定される今日において、防災文化は「識災豊か」である必要があると記して、本論を閉じる。

参考文献(一部抜粋)

- 矢守克也,2009,『防災人間科学』東京大学出版
- 京都大学防災研究所,1997,『地域防災計画の実務』鹿島出版会
- 鍵屋一,2003,『“地域防災力”強化宣言[増補]』ぎょうせい
- 佐藤郁哉,1992,『フィールドワーク～書を持って街へ出よう～』新曜社
- 陸前高田市,2014,『陸前高田市東日本大震災検証報告書』